

献 呈 の 辞

九州産業大学商学会は、平成14年3月末日をもって定年退職された大坪徳次教授そして三浦正一教授の両先生のご功績を讃えるために『商経論叢』の記念号を編集し、本学に対するご貢献に感謝の意を表するとともに、ここに謹んでお贈りいたします。

顧みますと、両先生は大学紛争や文部省の大学設置基準見直し等によって大学教育が大きく変わった時代、また九州産業大学商学部にとっても激動の嵐の時代に、研究・教育活動を続けてこられました。

大坪教授は昭和35年4月に、九州産業大学の前身である九州商科大学商学部の開学と同時に専任講師として赴任され、42年の長きにわたって商学部および大学院で「商業学」の分野での指導を続けられ、さらに図書館長などの要職にも携わってこられました。まさに先生の歩みは大学の歩みであったわけです。この意味で先生自身が九州産業大学の歴史であり、九州産業大学の建学の理想「産学一如」を体現されてこられた方であるということができましよう。また先生の温厚な人柄が教授会などの会議の雰囲気や和らげたことは数知れませんが、過去に精通された先生の博識に驚かされたのは私ひとりではないでしょう。このように私たち後輩が受けたよき指導と薫陶は計り知れないものがあり、まことに感謝に堪えません。

三浦教授は昭和58年4月に商学部教授として赴任され、17年間にわたって学部および大学院で「会計学」の分野での指導を続けてこられました。先生は学部で「会計学原理」の講義を中心に指導を続けられ、大学院では経済学研究科から商学研究科修士課程が分離・独立し、さらに博士後期課程が設置された際に、会計学分野の中心的な担い手として活躍されました。大学院で先生から「財務会計論」の指導と薫陶を受け、現在は税理士等の

会計専門家として活躍している教え子も多いと聞いております。このことはまさに先生の教育に対する情熱とお人柄を表しているといえます。

少子化時代に入り、多くの大学が全入時代に向かっておりますが、九州産業大学を含め多くの大学では、学生の学力低下の意味でも冬の時代に突入したといわれております。高等教育機関であり、先端研究機関であるべき大学の役割および存在意義自体が問われている現在、商学部の重鎮として活躍された両先生が大学から離れられたことは、大学にとって大きな痛手となっておりますが、私たち後輩一同、両先生のご指導を思い出しながら、21世紀に通用する九州産業大学商学部の創設をめざしてがんばる所存でおります。

両先生におかれましては、ご健康に留意され、益々ご活躍されますとともに、今後も九州産業大学を見守っていただけますよう、お願い申し上げます。

平成15年3月

九州産業大学商学部第一部長兼第二部長

高橋 公 忠